

News Letter

2013・12
No. 5



「私の理想の授業」とは？

「第1回 東洋 授業への声コンクール」を実施しました

学生FDスタッフでは、東洋大学生がより主体的に学び、行動し東洋大生であることに誇りをもてる大学をめざして、授業をよりよくする取り組みを進めています。今回、新たな取り組みとして、「東洋 授業への声コンクール」を開催しました。このコンクールは学生、教職員すべての人たちにとって大学での授業がよりよいものになるよう、広く授業への声を募集し、授業向上へ活かすことを目的としてい

ます。第1回目のテーマは、学生FDスタッフで協議し、「私の理想の授業」としました。

厳正なる選考の結果、今年度の入賞作品が決定しました。ご応募いただいた皆様、ありがとうございました。入賞者の方々への表彰式および座談会は、12月14日（土）に白山キャンパス8号館7階125記念ホールにて開催されます。

「第1回 東洋 授業への声コンクール」を終えて

神田 雄一（副学長・FD推進センター長・理工学部教授）

学生がより主体的に学び、行動し、本学の学生であることに誇りを持てる大学にしようと発足した学生主体の組織である「学生FDスタッフ」活動も年々、充実した取り組みを展開していただき成果が表れてきたことに敬意を表したいと思います。

学生FDスタッフによる初の試みである「第1回 東洋 授業への声コンクール」が実施され、学生および教員から韻文部門、散文部門合わせて18作品の応募がなされました。感謝申し上げます。いずれも秀逸な作品ばかりで選考会議では議論が白熱し、応募された皆様の授業に対する熱い思いが伝わってきました。各部門の講評についてはそれぞれの講評をご覧ください。理想の授業とは、画一的ではなく多様な形態があること、教員と学生が共に協働して作り上げていくことを改めて認識しました。

FD推進センター長賞には全応募作品の中から、学ぶことは、淡々としたことの繰り返しや辛いことも多いが最後は喜びとなって自分に返ってくる、そのような思いを本学の伝統である箱根駅伝と重ねた韻文にさせていただきました。今回の催しが継続的に実施され本学の教育の質向上の一助になればと願っています。最後にご協力いただいた多くの学生諸君、教職員の皆様に厚く御礼申し上げます。



「理想を実現するべく、頑張ります」

小越 凌（学生FDスタッフ代表・社会学部社会心理学科2年）

「理想の授業」というテーマで様々な声が届いたのですが、どれも個性あふれる作品で驚きました。大学に関わる人の数だけ理想があって、授業をたんに個人的な経験にするのではなく、それを皆で共有したいという気持ちが伝わってきました。何より学生の素直な意見や想いを読んでいて、ふと僕も同じように感じていたことを思い出し、選考会ではいくつかの作品への思い入れが強くなってしまいました(笑)これらの理想を実現するべく、学生FDスタッフとして頑張っていきます。

韻文部門入賞作品

FD推進センター長賞

猪狩 良太さん
(社会学部社会心理学科2年)
タイトルなし
箱根路を 走るが如く 学ぶ道

最優秀賞

岸野 ちおりさん
(社会学部社会文化システム学科1年)
タイトル「将来」
我が友と 切磋琢磨し いつの日か
授業の成果 倍返し

優秀賞

小林 佑歌さん
(総合情報学部総合情報学科1年)
タイトル「授業の理解力を高めるために」
前向いて 話してほしい 目で聞くと
心の中に 刻めるのにな

学生FDスタッフから

中川 靖菜 (学生FDスタッフ・経済学部経済学科2年)

短歌や俳句という限られた字数の中に、授業に対する思いや考えを述べることは難しいところがあるかもしれません。しかし、ほとんどの作品が共感できる内容で、個性豊かな作品が揃ったことを嬉しく思います。また、選考の際に教員と学生FDスタッフとでは作品に対する目の付け所が少し異なっていたようにも感じ、面白かったです。教員の方が応募してくださった作品は教員ならではの視点で歌われていて、学生との意見の共有につながると思います。授業への声コンクールをきっかけに、学生・教員ともに授業改善を考え発信していく雰囲気作りがより進むことになれば嬉しいです。

教員から

長谷川 勝久 (FD推進センター授業評価手法検討部会長・文学部教育学科教授)

韻文部門は、13作品の中から選考された。最優秀作品は、友と共に学びあい高めていくことができる授業、さらにその成果を社会に倍にして貢献できるような授業が理想の授業であるとの思いが読み取れた点が高く評価された。また、本年度の流行語大賞となったキーワードを取り入れている点も評価された。優秀賞は、学生は、先生の熱意や授業への思いが伝わってくる授業が理想の授業との思いが読み取り、身近に感じる内容であったことが評価された。他の作品の多くは、学生中心の学び、自ら学びたくなる授業が理想の授業との思いが伝わってくる内容であった。今後の教育改善活動の参考にしていきたい。

散文部門入賞作品

最優秀賞

「知的好奇心と向上心」

和泉 亮哉さん（文学部英米文学科2年）

金曜日が来るとひりつくような緊張感を覚える。そう、情報処理演習の授業だ。

私はこの授業を「理想の授業」の雛型として考えている。今回自分の理想を考えるにあたって、この授業で経験したことからモデリングして考えることにする。

情報処理演習と聞くと何を想像するだろうか。ワードやエクセルの知識や、ウェブサイト活用法などではなかろうか。否。私がここから学んだことは「社会の怖さ」と「向上心と探究心を持つこと」である。

「はい、テスト。聞いてないなんて言わせないよ、シラバスに書いてあるんだから。シラバスを読まずに受講することは、契約書を読まずにハンコを押すことと同じだからね。」

「社会の怖さ」を学んだ第一声だ。また、与えられた情報を正確に読み取ることと、間違えたときは最大限の謝罪とリカバリーが大切だということも学んだ。このように社会と如実に結びついた学問は、実用的で理想形の一つだと考える。

次に「向上心と探究心を持つこと」であるが、これはグループパワーポイント発表から学んだことである。

「今から俺が決めた学年も学科もバラバラのグループで、三か月後に発表してもらう。」

「よし、やるからには先生をうならせてやろう。」私たちの班は一丸となって準備を進めた。徹夜会議や国会図書館での情報収集、万全を期して当日を迎えた。結果は、厳しいフィードバックを返されたが、先生がこちらの真剣さに呼応してくれたのを肌で感じる事が出来た。

さて、私が考える理想の授業とは、実社会に通用する学問ができることが一つ。そして何より、学生が緊張感をもって臨める授業である。「先生」という存在は教壇に立った瞬間からパフォーマーである。「学生」は授業に参加するオーディエンスである。両者が意欲的に呼応することで、「教室」という会場は一体感が生まれる。授業は「live」なのである。双方が向上心を持てる授業が増えることをねがってやまない。

学生FDスタッフから

石井 俊輔（学生FDスタッフ・国際地域学部国際地域学科2年）

今回の東コン散文部門では全部で5作品が応募されました！ありがとうございます！応募された作品の中で幾つか共通していたものが、「社会で活かせるものを学びたい」という声でした！その他には、論理的にフィードバック強化型授業を提案したもの、皮肉まじりに授業の理想を表現したもの、講師への想いを詩にすることで学びの本質に触れたいと嘆いたものなど個性豊かな作品ばかりで、外の寒さを吹き飛ばすくらいの授業に対する熱い想いをひしひしと感じました！託された想い、無駄にはしません！

教員から

千明 誠（FD推進センター教育改善対策部会長・経済学部経済学科准教授）

散文部門は5作品から選考された。最優秀賞作品は、実際の授業風景・学習活動が生き生きと伝わる文章によって、専門分野の知識・スキルの習得だけでなく、知的好奇心や向上心など実社会を生き抜く力の養成に資する授業を理想の授業としている点が高く評価された。優秀賞作品は、これまでの授業経験をふまえて、理想の授業を「フィードバック強化型授業」とし、そのための教授法に関する具体的提案を複数示している点が評価された（ただし、提案の一部に対しては異論も出された）。全体として、学生諸君は教員と学生、あるいは学生同士の「対話」的要素が強い授業を理想の授業として感じたと感じた。今後の教育改善活動の参考にしたいと思う。

優 秀 賞

「私の理想の授業～フィードバック強化型授業による学生のモチベーション向上～」

吉川 章子さん（経営学部第2部経営学科4年）

今回の「授業への声コンクール」に対しまして、「フィードバック強化型授業」を提案します。フィードバックに焦点を当てた理由は、これまでの大学生活の中で自分の出した解答やレポートに反応を返してもらえたときに達成感やより強い意欲を得られたからです。提案1 レポートと試験へのコメント付返却

具体的な提案の1つ目としては、「成績評価に中間レポートと論述式試験を行い、どちらも教員からコメントを付けて返却する」というものです。学期中間に1,000字程度の小レポートを課し、回収後レポートの良かった点等を書き添えて返却します。学生はそのコメントを踏まえて論述式の試験に臨むことができます。

試験回答についても教員からのコメントを付けて返却することが望ましいです。

提案2 テスト結果を毎週 manaba コースで開示

授業内容によっては、上記のようなレポート+試験の形式が難しい場合もあるでしょう。その場合には「毎週小テストを行いその結果を manaba コースで開示する」ということを提案します。授業の開始時または終了前に毎回小テストを行い、採点した結果を manaba コースで発表する流れです。

学生にとっては小テストの結果によって期末試験の対策ができますし、教員にとっても学生の理解度を確認することができます。

提案3 1分間スピーチによる発信力強化

3つ目の提案は「毎回の授業の中で学生が1分程度のスピーチを行い学生・教員が感想を述べる」というものです。物事を1分で話せる長さにまとめることで「自分の言いたいことを人に伝える」能力が鍛えられます。

また、聞いていた学生にも良かった点・改善点を述べさせることで「話を良く聞き、感想をまとめる」力の向上と、感想を伝え合うことでの信頼関係構築も期待できます。

なお、どの提案も手間のかかるものですので、教員には手当等のインセンティブが必要だと思います。

ご意見
紹介

「法政大学 FD 学生の声コンクールについて」

川 上 忠 重

法政大学教育開発支援機構 FD 推進センターFD 推進プロジェクト・リーダー、理工学部教授



法政大学教育開発支援機構 FD 推進センターでは、「“自由と進歩”の建学の精神に基づく教育理念と教育目標を達成するためになされる、教育および学びの質の向上を目的とした教員・職員・学生による組織的・継続的な取組み」をFD (Faculty Development) と定義し、本学でのFD活動に学生の皆さんの声を活かすために、2008年度から「FD 学生の声コンクール」を、毎年テーマを決めて開催しています。テーマとしては、例えば、「教員・職員・学生とともに作ろう、より良い授業」、「私が選んだ、ちょっとイイ授業」、「よし、勉強しよう！ーやる気のスイッチが入った時」等、身近な授業を題材とし、「学生目線」からの授業改善アイデア、授業での経験や工夫についてコンクール方式で、散文、韻文、漫画の形式で募集しています。毎年のコンクールでの最優秀賞、優秀賞及び佳作作品は、翌年度の新入生向け「授業支援ハンドブック」

にも掲載し、新入生や教員・職員の方々にも広く紹介し、教員・職員・学生の共通の情報源としても活用されています。

現在までの「FD 学生の声コンクール」を振り返ってみると、学内のいろいろな授業での「工夫」が見えてきます。単に教員の講義や演習方法だけでなく、授業内での板書、授業構成、レジュメ内容、双方向型の授業運営等、学生が授業で感じた「リアリティー」ある感想や建設的な授業改善等に関するアイデアが紹介され、多くの学生が授業に対して「熱い思い」を持ってきていること、また、教員・職員間でも情報共有できることは、今後の「授業改善の礎」となることと確信しています。

東洋大学においても、是非、多くの学生が東洋大学らしい切り口で授業に関するアイデアを出して、本学にも多くの貴重な情報となることを期待しています。